

をする時期、高校生は①自主・自立、②勤労・奉仕の体験、③自己確信を高める時期と位置付けています」

職業観の育成を例に取れば、中学校段階では自分が何をやりたいか、何に向いているかを作文などを通じて考えさせ、働いている人の様子を知るために職場見学を実施する。そして高校段階では、もう一歩深めて職業人へのインタビュー、職場実習などから仕事の魅力、内容を理解する。また自己探求を深めると共に、職種や業種についてさらに詳しく調べることで、進路の決定へと結び付ける。中学校と高校とは、こういった機能分担が考えられる。

実践

学校と授業の公開

見学会や 体験入学で高校を 実感してもらおう

さて、中学校の生徒や教師に、高校について知ってもらった方法としては「高校説明会」「高校見学会」「体験入学」などがある。

「高校説明会」は、文字通り高校の教師が中学校を訪ねて、生徒や教師、

また共同研究は、高校は中学校の、中学校は高校の実践事例を知る場としても活用できる。双方が抱えている進路指導上の課題や、生徒の進路意識調査の結果を発表したり、今時の生徒氣質について思い、思いに話し合うような機会を設けることが可能だ。

ネットワークが確立したら、生徒の個別指導のためのシステム作りに取り組んでもよい。例えば、生徒の進路意識や進路希望の変化について記録できる「生徒のあゆみ」を作成する。書式を工夫して中学校、高校の6年間を通して使えるものになれば、進路指導上の連続性を保つことができるだろう。

2

保護者に自分の高校についての説明を行うというもの。多くの高校で以前から実施されてきたが、従来は入試の説明に終始しがちだった。だが高校の多様化・個性化が進んでいる今、進路不応を防ぐためにも、その高校の指導理念や特色、他校との違いを述べるこ

とが大切になってきている。山梨県のある地域では、「高校説明会」を単なる入試の説明で終わらせな

いように、中学校と高校が事前に打ち合わせて、高校進学のためのや高校生活などについて話すようにした。当日、生徒からはカリキュラムのことなど、かなり突っ込んだ質問があつたという。

また「高校見学会」は、中学生を自校に招いて高校の雰囲気味わってもらうという企画である。具体的には授業公開、部活動公開、施設見学、学校行事の見学などが挙げられる。

この「高校見学会」をさらに発展させたのが「体験入学」だ。高校の教師が教壇に立ち、中学生に実際に授業を受けてもらうわけだが、従来は職業科や専門学科で行われるケースがほとんどだった。だが最近、普通科の中にも実施する高校が現れている。宮城県のある高校で行われた「体験入学」では、中学生は、まず先輩たちの学習風景を見学した後、数学や英語などの特別授業を受けた。どの教科を受講したいかについては、あらかじめ生徒から希望を募った。生徒からは「高校の雰囲気味わえた」と好評だったそうだ。

高校の教師が中学生に教えるために、中学校を訪ねて指導をする「出張授業」も盛んになりつつある。生徒が楽しめるようにテーマにも工夫を凝らし、ディスプレイなどを取り入れた参加型の内容が多い。しかし、そのために

イベント的な要素が強くなり、普段の高校の授業とは掛け離れたものになり易い。とはいえ、生徒は、知的な刺激を受けることにより、進学意欲、学習意欲が高まるという効果がある。

「体験入学」や「出張授業」を実施する場合は、イベント的な時間で終わらせないためにも、その前後に説明会や質問会を開き、「中学校と高校での授業は何が違うか」「予習や復習はどれくらいしなければいけないか」といったことを中学生に伝えておく必要があるだろう。その上で「出張授業」などに臨めば、中学生はより深く高校の様子が分かり、高校生になった自分の生活をイメージできるはずだ。

これらの取り組みを実現するには、地域を挙げての体制作りが必要になってくる。まずは学区内の中学校や他の高校の教師とのネットワーク形成から始めてはどうだろう。容易にできる取り組みではないかも知れないが、進路指導面における中高連携が今後重要性を増すことは、間違いないようだ。

つながる

中学校と高校